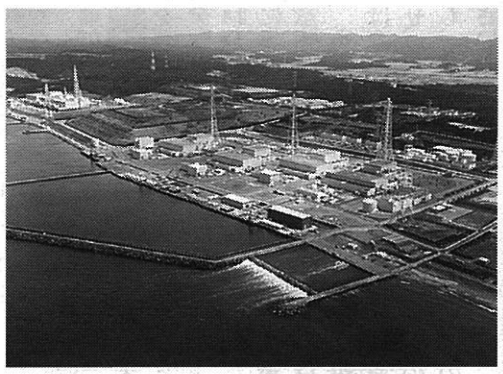
ざいごニュース

●原発、停止が続く



国の原子力規制委員会は東京電力の申請を受けて昨年11月から、原発の新規制基準に基づき柏崎刈羽原発6、7号機の審査を開始した。27項目の論点のうち地盤・地質関係では、周辺陸域・海域の断層の活動性を判断するための根拠を明示することなどを挙げている。今回、再稼働が焦点となる原子炉直下の断層について、東電側は「20万年前以降は動いておらず、活断層ではない」と主張しているが、原子力規制委員会側は現状ではデータ不十分と判断。活断層の調査を実施することが決定。調査は数か月かかると見込まれており、現時点では明確な再稼働の見通しは立っていない。

●水球、連覇を逸す

第89回日本選手権水泳競技大会水球競技が昨年10月、柏崎市の県立アクアパークで開かれた。前年に悲願の優勝を遂げた地元のブルボンウオーターポロクラブ柏崎（ブルボンKZ）は初戦で日本大学を大差で撃破。準決勝では日体大の若手メンバーで構成する健志台クラブと対戦、小差で敗れ、連覇はならなかった。また女子の部が正式に日本選手権として行われ、柏崎アクアクラブ女子が出場した。会場には多くの市民が詰めかけ、選手に熱い声援を送った。

●昨夏の海水浴客80万人

柏崎市内14海水浴場の昨年夏の入り込み客数は約80万1千人だった。市が発表したもので、数値は7、8月の2カ月間の集計。前年よりも16万5千人減少し、前年比では82・9％だった。市では2014年以降も誘客を継続して行い、海水浴客100万人の大台回復を目指したいとしている。

●鯛茶漬けは準グランプリ

東京ドームを会場に1月に行われた「ふるさと祭り東京・第5回全国ご当地どんぶり選手権」に連覇をかけて出場した柏崎地域観光復興推進協議会（内藤信寛会長）の「鯛茶漬け」は準グランプリとなった。グランプリには、昨年準グランプリの「米沢牛ステーキ丼」（山形県）。3位には昨年と同様の「八戸銀サバトロづけ丼」（青森県）が入った。同イベントには全国の15どんぶりが出店。鯛茶漬けは、だし汁に工夫を凝らすなどして満を持しての出店だった。10日間の大会期間中、柏崎からの日帰り応援ツアーの一行や、柏崎にゆかりのある人たちが会場に足を運び、地元の鯛茶漬けに舌鼓を打った。

●希帆ノ海が幕下優勝

刈羽村出身の大相撲・希帆ノ海（本名　山崎譲、出羽の海部屋）が昨年9月の秋場所で7戦全勝で幕下優勝を果たした。その後、3月の大阪場所では幕下9枚目で3勝4敗だった。希帆ノ海は元出羽の海親方（元関脇・鷲羽山）が定年退職する4月までに十両に昇進したいと語っていたが、その希望はかなわなかった。

●誕生は592人

市の住民基本台帳によると、2013年1年間の出生数は592人だった。前年（623人）に比べ31人の減となり、少子化傾向に一段と拍車がかかった。年間の出生数はこの10年間の最少で、初めての500人台だ。

劣等生万歳

スポーツで街を活性化

村山哲二（高35回）

昭和57年9月、我が柏崎高校野球部は上越地区予選を突破してベスト16に進出、春の甲子園に繋がる北信越大会への出場をかけた新潟県大会への切符を手にする。1週間後に開幕する県大会を前に、主将の長谷川晋（胎内中学教頭）と副主将の井比孝広（柏崎市役所）を中心にチームワークだけは抜群の、10人の2年生部員全員が大きな決断を下す。

「必ず3つ勝って北信越大会に出場する！」

実はその日、当時顧問して頂いた、故・大塚先生から極めて重要な連絡があった。それは、北信越大会の開催日程と2学期の中間テストの日程が重なっていたが、もし出場した暁には中間テストを免除されるという内容であった。勉強と北信越大会。残された1週間をどう過ごすかを迷っていた10人は、負ける（中間テストを受ける）という可能性を頭から一切排除して、徹底的に練習に励む事を決断したのだ。全員で昼夜を問わず机に向かわずにバットを握り、一心不乱に練習に取り組んだ。

1回戦では、優勝候補の筆頭と言われた新潟南高校を村山のタイムリーなどで初戦突破。ベスト4をかけた2回戦では、古豪、長岡商業と対戦。村山の3安打猛打賞の活躍が光り突破。テスト免除まであと一つだ。

テスト免除をかけて臨んだ準決勝。相手は糸魚川高校。緊迫した好ゲームだ。8回を終了して同点だったが、9回裏、神様は非情な裁定を下す。思わぬミスが出て、サヨナラ負けを喫してしまった。10人は負けた事よりも、直前に迫った中間テスト受験の準備を放棄した事に対しての罰を恐れた。

30年以上経った今でも取締役会の前、シーズン前の営業追い込み時など、追い込まれている時に、夢でうなされる事がある。中間テストで数学の答案用紙を受け取った時に味わったショックと恐怖は、今でも悪夢となって現れる。

追試会場を埋めた生徒の約半数が野球部だった事は言うまでもない。

2学期、私は321人中、317番の成績表を受け取った。打ちひしがれる私の横で、がっくりと肩を落としてうなだれていたのは、現在、市役所職員として市民の生活を守る井比孝広だ。彼の成績表を覗き込むとなんと320番だった。優越感に浸る状況でないのは充分に理解していたつもりだが、なんとなく心が安らいだことを憶えている。※余談だが、この話を昨年の同校同窓会総会の基調講演で話をした時、自分は318番だったと懇親会でカミングアウトした男こそ、柏崎市民の暮らしを支える総合商社の社長であり、福祉・介護事業を通じて地元を支える柏崎のビジネスリーダー、石坂泰男である事はナイショだ。

30年前、私達の母校である柏崎高校は、「自由」だった。勉強が出来る生徒は勿論、勉強が苦手な生徒も、学校には自分の居場所があった。活躍できるフィールドを先生方が用意してくれた。私の友人を劣等生ばかり登場させたが、高柳の同級生で大親友の吉川浩民の成績は一番。東京大学を経て自治省に入省し、今は群馬県の副知事として活躍している。勉強もクラブ活動も文化祭も体育祭も、そして恋も、1番も317番もみんなが全力投球できた。

今、野球に携る仕事をさせて頂いているが、その礎は、間違いなく柏崎高校野球部での3年間で築かれた。2003年3月23日、野球部の後輩は、私達野球部OBと応援団に、「甲子園の第一日初戦」＝「アルプススタンドでの入場行進見学」というとてつもないプレゼントを用意してくれた。終盤に決勝点を奪われて惜しくも初戦敗退した際、40近いオヤジたちが肩を抱き合って声をあげて泣いた。このメンバーでこんなに泣いたのは、20年前の夏に敗れて以来の事だ。

「スポーツは、街を劇的に活性化させる力を持っている」

この日に私は確信した。スポーツで街を元気にする仕事がしたい。

1年かけて事業計画書を作って、柏崎で最初に相談したのが、甲子園でぐちゃぐちゃに泣く私を抱きしめてくれた小林文英堂の小林英介先輩。「夢の詰まった仕事だ。哲にしかできない。応援するからがんばれ」熱い先輩からのエールをもらったから私は動き出すことが出来た。

2015年問題、原発再稼働問題、柏崎に横たわる課題は決して小さくない。柏崎高校も定員割れが続く。市内で学校の近くで暮らす野球部の先輩と話した時、「最近の柏高生は大人しい。教室から歓声や笑い声が聞こえてこないんだよ。今の柏崎を象徴しているのかなあ」。先輩の言葉にただ頷く事しかできなかった。

この状況を悲観することなく受け止められる人材が、柏崎の未来を変える。未来を変えられる人材は、自由でポジティブで勤勉だ。ゼロから一を作ることが出来る。その人材を育て、柏崎に帰ってくる環境を創ること事こと、柏崎高校に携わる人の使命だと思う。勿論、それを柏崎で完結できる事が最高だ。

私は今年50歳になる。最前線で戦う事ができるのはあと10年。スポーツで人材を地域社会に戻すこと、その環境を創造する事が私に課せられた使命と思って、体力が続く限り、頑張ってみようと思う。（株式会社ジャパン・ベースボール・マーケティング代表取締役高35回）

50代のおやじの夢

声優・堀井真吾（高28回）

昨年、TVで大ヒットしたドラマ「半沢直樹」「倍返し」が流行語になるほど、日本中が熱狂した。

8年程前に、朗読劇「物語シアター」を立ち上げ、いつも朗読劇になる面白い話はないかと、物色癖がついている私にとっても、興味をそそられる現象だった。世間が注目する小説というのは、やはり読んでおかないと気が済まない。後になって後悔したくないので、書店で平積みにされた、池井戸潤原作の文庫本を購入した。

案の定、頁をめくると間もなく、スピーディーな展開にぐいぐい引き込まれていく。いきおい、同じ作者の書いた「下町ロケット」にも手を出すと、もう寝る間も惜しんで読むはめになった。おかげで数日間、兎のように赤く充血した眼のまま、仕事のナレーション原稿を読んだ。

主人公は、以前、宇宙科学開発機構の科学者として、ロケット開発に携わっていたが、国運をかけたロケットの発射に失敗し、責任をとって辞任した経緯がある。今は、親父の後をついで下町の町工場の社長をやっている。彼があるとき、部下にこう諭す。

「俺はな、仕事っていうのは、二階建ての家みたいなもんだと思う。一階部分は飯を食うためだ。必要な金を稼ぎ、生活していくために働く。だけど、それだけじゃあ窮屈だ。だから、仕事には夢がなきゃならないと思う。それが二階部分だ。夢だけ追っかけても飯は食っていけないし、飯だけ食えても夢がなきゃつまらない。お前だって、うちの会社でこうしてやろうとか、そんな夢、あったはずだ。」

部下は、それは青くさい理想だと反発する。思いはあっても、なかなか夢は仕事と直結しない。

私の場合はどうか…。幸いなことに人並みに結婚し、子宝にも恵まれた。しかし、家族と自分の夢を天秤にかけた時、どちらを選択するかとなれば、家族の幸せを選ぶだろう。

20代から30代にかけて、俳優の道を走りつづけた。その後、30代後半で、声の仕事に特化して収入を得る道を選んだ。声優をメインにしてからは、仕事にも恵まれ、経済的にも安定するようになった。だが、一つのTV番組のレギュラーをつかむのも容易ではないし、実力も運も必要な、厳しい競争の世界であることに違いはない。

そんな時、柏高同窓生の蓮池薫氏が奇跡的に北朝鮮から帰還し、彼のために、朗読劇のイベントを都内でやることになった。もう、あれから10年の月日が流れた。たまに故郷で会う彼は、会うたびに充実した円満な雰囲気が増してくる。あの北朝鮮で失われた24年間を取り戻すかのように、エネルギッシュな活躍をしている。

実は、そのボランティアで行った公演が、今の「物語シアター」立ち上げのキッカケとなった。それは、私が半ばあきらめかけていた、夢の舞台の創造に向かって再び歩き出した瞬間でもあった。人に照らしたはずの灯りが、かえって自分の足元を照らすことになろうとは、その時は思いもよらなかった。

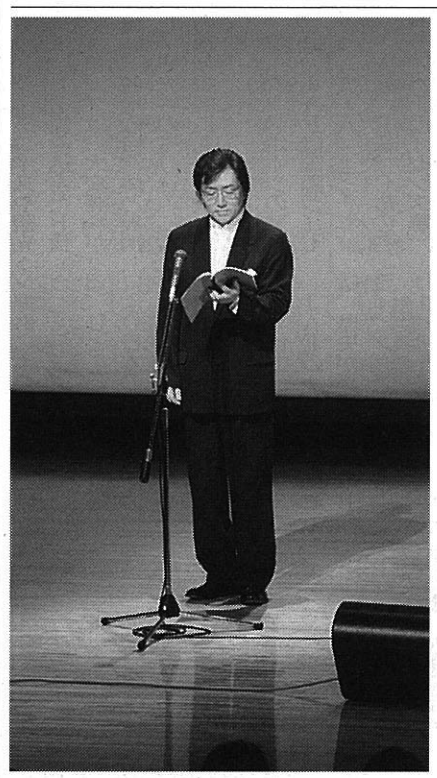
最初の頃は、朗読を主体とした表現だったが、徐々に朗読と芝居と、時には舞踊が混然一体となった、独特な舞台パフォーマンスへと変貌していった。

要は、お客様が観て聴いて楽しめるものなら何でもありだ。ただし、レベルの低いものをやってもソッポを向かれるだけ。お客様の観る目は、実に厳しい。

昨年11月、東京都教育庁からの招待で、物語シアターによる都庁公演が実現した。朗読や読み聞かせをしている人たちに、プロのパフォーマンスをして欲しいとの依頼だった。400名のホールに、ほぼ満員の人たちが詰めかけた。公演後の質疑応答にも花が咲いた。確かに今、朗読熱は高いと実感した。

私と女優と尺八奏者の3名。それに加えて音響スタッフ1名。シンプルだが、これだけで十分人を感動させ、楽しませることができる。これまで積み上げてきた一つの成果でもあった。

良い本で、演者に力があれば、音楽や効果音を利用することで、立体的な朗読劇を創造することができるのだ。

最近益々進化するデジタルな文化とは、対極にあるようなアナログな世界だが、人間の表現文化の本質において、デジタルもアナログも大差はない。むしろ、視覚中心の時代にあって、生の声や音は心の癒しになるに違いない。

鑑賞していただく人に、真実の声と本物の言葉を届け、感動し、楽しんでいただくこと。そして、大勢の人に表現することの喜びを知ってもらいたい。それが私の夢であり、ライフワークと言えるのかもしれない。（高28回）